
江守友和の冒険 蛭（ひる）

HBE口ッカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

江守友和の冒険 蛭^{ひる}

【Nコード】

N6705I

【作者名】

HBEロツカ

【あらすじ】

ジャック・ルビーのマスターは驚いた。

「こんなに綺麗なおねいちゃんが、……江守友和だつて？
そんな馬鹿な！」

チヨンガーオヤジの友和と、一緒に過ごす為に、なんと、aタイ
プがやってきたのだ。

——そして、更なる冒険が始まる。

イブの奇跡

世間は師走である。

パラル・ワールド『NKS Rの世界』で正月を過ごした友和は、元の世界で再び正月を迎えようとしていた。

この世界での友和は、そりゃ寂しい一人者のオヤジである。なにしろ年末年始はチョンガーにとっては嫌な季節だ。

フリーの女が消え失せてしまった感じがする。

大体、男と女は、半分ずついる筈じゃなかったのか？

水商売の女として仕事を忘れ、本命男と浮かれ歩く。

クリスマスなんて最低だ。

特にイブは酷い。

今夜なのだ。

たった今までおせじを言ってた女が、閉店と同時にプレゼントをむしり取るなり、脱兎の如く本命の彼氏の元へ飛んで行く。

「ペンギンクラブ」で馴染みの女の子に、すかつとふられた友和は、ため息を一つ漏らしただけで、別に落ち込みもせず、ジャック・ルビーへ向かった。

イブの夜、本命男と過ごせない女は、どこに隠れているというのだ。

ドアを開けると、はたして伸恵のぶえがいた。

一人寂しく、善行のボトルを飲んでいた。

「やあメリークリスマス。これ、ささやかなプレゼント」

ペンギン・クラブで貰ったプレゼントの包みを伸恵に差し出す。

どうせママの剛美つよみが選んだ物だろう。たいしたもんじゃあるまい。

友和は彩ちゃんという若い女にねだられ、鼻の下をのばして、ブランド品のファッショニングを購入して、準備万端整えた。

そして、勇んでアフターに誘ったのだった。

結局、調子良く品物だけをむしり取られ、あえなくフラれてきたばかりであつた。

——ラーメンくらい付き合ってもいいじゃないか！

まあ、今夜は、寿司屋ぐらいは連れて行くつもりの下心だったのだが。

それでも伸恵は喜んでいる。

いじらしくて可愛い奴だ。抱きしめてやりたくなる。

考えてみれば友和は『NKS Rの世界』で、伸恵の肉体をすみからすみまで知ってしまったのだ。とても他人とは思えない。

善行なんかとは別れなさい。と言ったら驚くだろうな。

「友和さんイブはお一人？」

と伸恵が言った。

友和は、吹き出したい思いをぐつとこらえる。

何故なら、善行とデキてる女は、美那子にしても、ラブホテル「セーヌ」の千鶴ママにしても、この伸恵にしても、いつのまにか友和の事を、苗字の江守ではなく、名前で呼ぶようになるからだ。（

超電導美那子WXY 参照）

善行の口癖が、すっかり移っているのだが、本人はちつとも気付かない。

ともあれ、イブらしい返事をしようと思った。

「いや、一人じゃないさ。伸恵ちゃんと一緒にだよ。イブは僕達の為にあるのさ」

ちっちゃい目を精一杯見ひらいて、カウンターの伸恵の隣の席へにじり寄る。

伸恵は吹き出した。

「あははは友和さんったら、おつかし〜」

バーテンのロリ山田が笑いながら言った。

「ぎゃはは江守さん、スッゲー似合わね〜」

マスターも笑っている。

「江守さん、熱でもあるんじゃないの？」

「くそっ」

むくれる友和であった。

見知らぬ男が入ってきた。

グレーのバーバリーコートに白いカシミアマフラー姿の、背は高く、百八十センチ以上はある。

ひょっとして、百九十センチ以上かもしれない。

まるでコートの中に建て看板でも仕込んでいるような、まるで不自然に角ばった体型の、のっぽの中年男なのだ。

七三分けで、青白い顔に真っ黒なサングラスをかけている。

店内は、伸恵と友和がカウンターに居るだけの貸切状態だったの

だが、ためらう様子もなく、ズカズカと近づいてきた。

そして、友和の脇の椅子にドスンと腰を下ろした。

さっそく話しかけてきたのだが、まるで声帯を使い慣れていないといった感じの、変な声を出す。

「はじめまして。私、『連合』のモータウン田村と申します。特異点の江守友和さんですね。最近はESPもお使いになるそうで、結構な事ですな」

どんな顔をして、どんな返事をしていいのか解らない友和は、とりあえず、黙っている事にした。

男は腕時計をいじりながら喋り続ける。

「ま、無理もない。少々レクチャーしましょうね。――

あなたよくご存知のフェロモン号ね。あれは連盟の時空船です。

銀河系には連盟しかないとお考えでしょう？

でも実際はそうじゃない。

『連盟』以外にも、『銀河同盟』、『銀河共栄圏』、『銀河系互助会』、そして我々の『銀河連合』。

ヒューマノイド型だけでもこれだけあります。

規模と勢力は、ま、似たり寄ったりですな。

銀河系の中心部は、もっと多くなります。

もっとも、あの辺は、シリコン系生命体に始まって、プラズマ型とか、虚数逆進化水虫型とか、岩石七転び型とか、我々の考える生物の概念とは、ずいぶん違うやつが、うようよと……まあ、様々ですな」

ここで気付いたのだが、――時間が止まっていた。

なんと、伸恵もマスターもロリ山田も静止している。

モータウン田村は喋り続ける。

「あ、これ、止まってる訳じゃありませんよ。時間が十二分の一
の速度で流れているのです。つまり、ゆっくり動いているのです」

友和は、手塚治虫の『不思議な少年』を思い出した。

「時間よー止まれ！ ですか？ 懐かしいなあ」

「フェロモン号でご覧になったでしょ？ ——

タイム・エキスパンダー！（時間引き延ばし機）（二十分間の世
界 参照）

これが新開発の、連合の物です。

簡易型ですけどね。

一分間だけ作動するのです。

一分間を十二倍に引き延ばすのですよ。

腕時計を付けている私と、対象者ビームを浴びたあなた、つまり
我々にとって、この一分間は十二分間になるのです。

お近づきのしるしに進呈しましょう」

田村は腕時計型のタイム・エキスパンダーを外して友和に渡した。

そして時間が戻った。

「お飲み物は何にいたしますか？」

とロリ山田。

「ミネラルウォーターと角砂糖」

と田村が答える。

「角砂糖ですか？」

「そうだ」

「何個くらいお持ちしますか？」

「たくさん。いっぱい……うん。うん。いっぱい下さい」

マスターが話しかける。

「まあ、お客さん、コート脱いでリラックスして下さい。着たままだと、帰る時寒いですよ」

「平気だ。それより角砂糖、早く。早く。早く」

田村はなんと、よだれを垂らしているではないか。

ロリ山田が、皿盛りにした角砂糖をカウンターに置くと同時に、ガリガリと貪り食い始めた。

「友和さん、お知り合い？」

と伸恵が尋ねる。

「いや、初対面のひとだよ。……時計屋さんだそうだと友和。」

角砂糖をあつという間に平らげた田村は、皿にのこった砂糖の粉を綺麗に舐めて、やっと人心地といった感じで言った。

「ここがスイッチです。二十四時間に一回だけ作動させる事が出来ます。通常は腕時計としてお使い下さい」

田村は目一杯、愛想笑いを浮かべているつもりなのか？
それにしても表情のよくわからない顔だ。

とにかく、黒眼鏡の下、ひん曲がった細長い鼻。まさに国籍不明だ。

その下にある薄い唇の口が、アイウエオの（エ）のかたちになっている。

「成る程」

と言いながら腕時計をいじっている友和なのだが、不満げな顔をしている。

「どうです？ お気に召しませんか？」

「ああ、デザインが、ちょっと安っぽいな」

「デザインですか？——」

流石は特異点、江守友和さんですな。

おっしゃる事が一味違います。

まあ、我々『連合』は、特異点だけの特別チームを作る為に、江守さんもお誘いに伺ったのです。

『連盟』と違って我々は、うるさい事は一切申しません。

特異点の皆さまの利益を第一に考えます。な、な、な、なんと
言っても特異点様、様、様、さま、さま、さま、さま」

田村は目を白黒させている。

少し、バグっているようだ。

「さま、さま、さま、サマータイム。サマンサは魔女だよ。……失
礼しました。まだちょっと、地球語がですね……ニホンノクニノコ
トバ……そうそう。日本語でしたね」

「ちゃんと解るよ。……なかなか流暢なもんだよ」
と友和。

「ありがとうございます。あいうえお。笑う時はエの形、エ、エ、
エ、もう大丈夫です」

そして、またもや（エ）の形の口をつくった。

そして田村は、笑い顔のまま固まっている。

「田村さん、その連合のお世話になると、過去の時代で暮らしたりする事も、許されるのかね？」

「エチレんです。エン合はメズ、テク異点の希望を、デイいちにケンゲえめす」

田村の口は（エ）の形のまま、固まってしまったようだ。
あわててミネラルウォーターでガボガボとうがいをして、そのままゴックンと飲み込んだ。

「あいうえお、かきくけこ、さしすせそ、失礼しました。戦国時代だろうが、古代ローマだろうが、ジュラ期だろうが、お望みの時代で暮らしていただきます」

田村は、四角くて大きな胸を反らす。

未練たらしくも、安土桃山時代へ戻って、百池百々大夫（ももちももだゆう）の妹、桔梗と祝言を挙げたい友和であった。

正直な処、特異点のなんたるかとか、ESPのなんたるかなど、どうせ分かりっこないし、どうでもいいと思っていた。

寂しい現代とおさらばして、桔梗と沙織と小鹿のいる、あの時代へ戻りたいのだ。

——ああ、ばら色に輝く安土時代！ モテモテだったなあ。

——こんな冷たい世間にや、未練は無いよ。

「山崎の合戦が終わった直後の時代に、連れてって貰えるかい？」
と友和は目をつるませて言った。

「よござんすよ。その前に『連合』との契約を済ましてしまいまし

よう」

と嬉しそうに田村が言った。

だしぬけに、伸恵が話に割り込んできた。

「お話中ごめんなさい。ねえ友和さん。ナミちゃんのショー見に行かない？ 前からナミちゃんに誘われてたじゃない？ ねー友和さん！ パンプキン・クイーンに連れてってよ！」

トイレに行つて戻ってきた伸恵が、話に無理矢理割り込んできたのは理由わけがあつた。

トイレから帰ってくる途中、友和と話しているモータウン田村の大きな背中が、もそもそと動いているのを目にしまったのだ。

立ち止まつて目を凝らして見たところ、

まるで何匹もの鼠かなんか、得体の知れないものが、コートの中を、いやスーツの中か？ ワイシャツの、或いは肌着の中かもしれないのだが、忙しく走り回っているように、膨らんだりへこんだり、凸凹に波打っているのだ。

実に不気味であり、尋常な光景ではない。

マスターとロリ山田は話をしていて、伸恵の目配せに気付いてくれないのだ。

本能的な恐怖を覚えた伸恵は、その事を友和に伝えたかったのだ。

友和にしても、話の最中に、モータウン田村と名乗る、この男の鼻の穴から、薄桃色の触手がにゆるにゆると出てきては、また戻っていったり、耳の穴から出てきた触手が頬を這い進んで行く様子を、何度か目にした。

しかし、

——コイツ、気持ち悪いな！

とは思うのだが、別に不思議だとは思わないのだ。

何しろ、本人が『銀河連合』の宇宙人だと言ってるのだから。

（不気味系）とか（キモイ系）の奴なのだろうと、納得するしかないではないか。

とにかく友和は、もう酔っ払っていた。

「よしわかった。伸恵ちゃん、行ってみよう。田村さん、契約の前に、腕時計のお礼に、面白い所へ案内してあげましょう」

こうして友和と伸恵と（キモイ系）宇宙人のモータウン田村は、オカマのナミちゃんの勤めるショー・パブ（ゲイ・バー）「パンプキン・クイーン」へ向かった。

道々伸恵が小声で話しかけてきた。

「友和さん、あの人変なのよ。なんだか、人間じゃないみたい」

友和もひそひそ声で、しかし、事も無げに答えた。

「そうなんだ。宇宙人だよ。気持ち悪いんだ」

友和という男の無神経ぶりには、あらためてあきれる思いの伸恵であった。

「パンプキン・クイーン」は今夜2度目の、つまり最後のショータイムの真っ最中であった。

さすがはクリスマス・イブの夜である、大盛況であり満席状態なのだ。

フィナーレは6人の美しきニューハーフの群舞である。

途中から、自ら（化け物系）と称するママを始めとするコミカルな、ナミちゃんも含めたブスオカマの4人が加わり、ショーは抱腹絶倒のクライマックスを迎えた。

やんやの大喝采。

割り箸に挟んだ千円札が乱れ飛ぶ。

不景気の折、流石に5千円札や1万円札は見あたらぬ。

乾杯とハグが続く中、ナミちゃんが息せき切ってやって来た。

「ありがと。友和さん伸恵ちゃん、来てくれたのね。ナミちゃん感激」

「ナミちゃんおっぱい仕舞えよ」

と友和。

「何よ！ ナミちゃんのおっぱい綺麗でしょ？」
とナミちゃん。

「ミネラルウォーターと角砂糖ください」
とモータウン田村。

パンプキン・クイーンではクリスマス・イブの乾杯が続く。

さて、クリスマス・イブだというのに、「ジャック・ルビー」には、一人も客がいなくなった。

マスターとロリ山田が、開け損なったシャンペンを飲んでいる。

「あーあ、せっかく江守さん来たのになあ。あの気持ち悪い大男のせいで、伸恵ちゃんも連れてつちやいましたねえ」

ロリ山田が残念そうに言った。

「いいんだ。もう閉めよう。明日はクリスマスだ。きっとみんな来てくれるさ。そして、たぶん、忙しくなるさ」

哀愁漂うマスターが、カンバンを仕舞っていると、女が入ってきた。

綺麗な若い女である。

くりくりとした目が印象的な、色白で小柄な娘だ。

普通の地球の女の恰好なのだが、それはフェロモン号のaタイプであつた。

驚いているマスターとロリ山田の前を、ブーツの足音をコツコツ鳴らして入って来ると、カウンター席に座った。

aタイプはコートにスカートにブーツ、髪もピンク色ではなく、妙にぞくつとくる不思議な光沢の黒髪であつた。

地球の女に化けてはいても、隠し切れないエキゾチックな、不思議な魅力が溢れ出す。

おもむろに携帯を取り出して話し始めた。

「もしもし、友和さん？ 私。aタイプよ。地球時間で1年間の休暇が取れたの。コロニーに帰ってもつまないから、遊びに来ちゃった。すぐに会いたいわ」

あんぐりと口を開けっ放しのマスターの脇で、ロリ山田が尋ねた。「友和さんって、もしかして、江守友和さんの事ですか？」

aタイプは、とびっきりの笑顔でうなずいた。マスターがモゴモゴと喋っている。

「こんなに綺麗なおねいちゃんが、よりによって、江守友和だってえ？ そんな馬鹿な！」

チヨンガーオヤジの友和と一緒に過ごす為に、aタイプがやってきたのだ。

まさにイブの奇跡とでも言っべきだろう。

「パンプキン・クイーン」

ショーパブ、パンプキン・クイーンは盛り上がっている。

華麗なバタフライを付けた、トップレスの美女系ニューハーフに交じって、凄いのが4人いた。

黒とピンクの二着のシースルーのネグリジエを、太った肉体にぐるぐると巻き付けた、五十路のママ、あぐりと、白い経帷子のような着流しを着た、スキンヘッドなのだが、そのぶん化粧のどぎついなすびである。

四十路のナミちゃんが、若い美女系ニューハーフ達と張り合って、あくまで同じエロチックな、オッパイ丸出しの衣装を着ているのも不気味だ。

チイママは三十代の、こいつも変だ！ 髭剃り跡も青々しく、長身で筋張っていて喉仏も大きい。

男性ホルモンは人並以上に活発な感じ。

これじゃまるっきりの男じゃないか！

バレエのチュチュを着ていて、その名も乙子おへいという。

まるで、一人で「モンテカルロバレエ団」をやってるみたいだ。

この、頭の抜群に良い乙子は、企画に演出に司会にと大車輪の活躍なのだ。

「凄いわねえ。練習大変じゃない？」

伸恵は、全国オカマの中で一番身長が低いというのがウリの、百四十五センチの可愛コちゃん、ちいちゃんに話しかけている。

ちいちゃんは、自分自身の、むき出しの綺麗な乳房を、ぐっと握ってみせた。

「乙子さんが鬼のように厳しいの。毎日もう、くたくたよ」

声は、野太い男のものであった。

なすびのスキンヘッドと経帷子は、毎回ショータイムの後、女性客の寄せ書きでいっぱいになる。

女性客もけっこう多いのだ。

そして、酔っ払って嬌声をあげて大騒ぎの店の中、男の客も、女の客も、オカマ達も、仲恵を除いて誰一人気付かなかったのだ。大男のモータウン田村の、大きなズボンの裾から、赤黒い、なんともいえないおぞましい形体の、大きな蛭が、新しい宿主を求めて無数に這い出してきた事を。

仰天した仲恵は、友和とナミちゃんの耳を引っつかみ、有無を言わずドアの外へ引っ張り出した。

「私、見たわ！ あの男のズボンの裾から、何か得体の知れないものが、四方八方へ這い出てきたのよ！」

宇宙蛭

太陽系を含む、銀河系周辺部に棲息する「宇宙蛭」は、体長十五センチから二十五センチ程で、それ自体の知能はさほどのものではない。

宿主の脳を使い、宿主次第で高脳な思考力を持つようになる。

子孫繁栄と勢力拡大の本能と野望は、人間様と何ら変わりはないのだ。

パンプキン・クイーンの店内は大騒ぎになっていた。

「うわ！ 誰だ！」

「ひい！ あわわわ」

「何だ！ ありやりや」

「うひゃあよせよ」

「変な事やめろ！」

「ゲゲ！ オカマ掘られた！」

ズボンの裾から入り込んだ、恐ろしい宇宙蛭のあるものは、脚を這い上がり、肛門から無理矢理入り込む。

姿を隠す事を第一に考える生存本能の強い蛭だ。

また別の宇宙蛭は背中へ張り付き、脊椎を目指し、皮膚から肉へ微細な穴を開ける。

少しでも早く脳に触手を伸ばしたい、支配欲が強くてせっかちな蛭だ。

或いは、大便が嫌いな蛭なのかもしれない。

いずれにしても、頭や顔までは登ってこない。

危険が大き過ぎる行動は、本能が抑制するのだ。

女性客も騒ぐ。

「きゃあー！ 何なの？」

「ああん、嫌、何？ 何？」

「イヤン！ そんなトコ」

「うふん、やめて、やめて」

むしろ女性の方が、理想的な宿主の肉体だと言えるだろう。

排泄用ではない隠れ場所があるからだ。

脳を支配するまでには、背中の首筋近くに張り付いた蛭で約2時間、肛門や女性器に入り込んだ蛭で、約4時間を要する。

肉体の他の場所に張り付いた蛭も、宿主を支配するまでには、それなりの時間がかかる。

緩慢ではあるが確実に、免疫とのトラブルを避けて、体質を同化させつつ、ジワジワと触手を延ばしてゆく。

脊椎や血管を通り脳に達した触手は、微細な太さからどんどん太さを増して行くのだ。

さて、寄生するという事は、栄養を取り、分裂して子孫繁栄をする為である。

宇宙蛭は宿主に取り付くと、すぐに栄養を取り始め、成長を続けて、ある程度の大きさになると分裂を始める。

だから、ほとんどの場合、脳を支配する頃には、すでに分裂して増えているのだ。

そしてこの蛭共は、知性を保つ為に、脳だけは食わずに最後まで使い続ける。

モータウン田村はすでに、無数の宇宙蛭の巣と化していた。

もはやその肉体は蜂の巣状に穴だらけとなり、脳に達した触手も、蛭同士の物が幾重にも交錯して絡み合っている。

だからこの宿主は、余命いくばくも無かった。

すぐに新しい宿主に取り付くと同時に、前途有望な宿主にも取り付かねばならない。

そこで蛭共は、この宿主、銀河連合諜報員である高脳なデネブ星系人、モータウン田村の脳を使って考えたのだ。

——このところ活発な活動をしている、特異点江守友和の調査を開始していた宿主の、予備知識を生かして。

——友和に近づき、寄生して、時空を越えて、種族をばらまき繁殖してやろうと。

伸恵はドアから少しでも離れて、遠くへ逃げ出したかったのだが、ナミちゃんは事態がちつとも解っていないどころか、中では何か馬鹿げた、楽しい遊びが進行中だと思い込んでいた。

そんな時に友和の携帯が鳴った。

店のカンバン脇の側溝へ、酔っ払ってへたり込んだまま電話に出ると、久々にaタイプからであった。

「もしもし、友和さん？ 私。aタイプよ。地球時間で1年間の休暇が取れたの。コロニーに帰ってもつまないから、遊びに来ちゃった。すぐに会いたいわ」

「あれれ？ 飲みすぎちゃったなあ。携帯から空耳が聞こえる。空耳アワーだな。えゝ空耳のaタイプさん、聞いてくださいね。俺は

寂しいんだ。昔の時代に戻って、桔梗と祝言を挙げたいんだ。オジサンのこの気持ち、ワッカルツカナー？」

「なんですって？ 桔梗ですって！ ばかあつ！ どうして桔梗なの？ せっかくきたのに！ ……そこにいてね！ すぐそこ行くから！」

「お？ 空耳が怒ったよ。やっぱ飲みすぎだな」

ところで、ナミちゃんは店内に戻りたくてしょうがない。

「ねえ伸恵ちゃん、もういいでしょ？ 中に戻りましょ。ナミちゃん寒いわ」

伸恵は震える声でたしなめる。

「馬鹿な事言わないで！ 中の人達の悲鳴、聞こえなかったの？」

「あつらゝ、悲鳴じゃないわよ。なんかきつと、楽しいゲームが始まったのよ。ね。帰ろうよ」

とナミちゃん。

その時ドアが開き、大男のモータウン田村が、ぬつと姿を現した。田村は、どら声になった。

「さあ特異点友和さん、契約を済ませましょう！」

大きな田村のズボンの裾から、何十匹もの宇宙蛭がざざつと地面にぶちまけられた。

「ぎゃあゝ何これ？ 気持ち悪いゝ」

驚愕のナミちゃんだ。

伸恵は店の玄関先にあつたほうきをふり回し、ナミちゃんの脚に付いた宇宙蛭を叩き落とす。

電話を終え、立ち上がった友和の脚にも、一匹跳びついた。
伸恵の太ももにも跳びつき、よじ登って行く。

伸恵が叫ぶ。

「あー多過ぎるわー！ 友和さん助けてー！」

友和は伸恵のスカートをめくり上げ、宇宙蛭をつかんで地面に叩きつけた。

「うわあ気持ち悪い！ こいつ、ぬるぬるだ！」

モータウン田村が不自然に身をよじって叫んだ。

「はっはっはっ無駄な抵抗はやめなさい。すぐ済みます。大人しく受け入れるのです。そうすれば最高の悦楽を味わう事が出来るのです」

そして、目をむいてぐわつと大口を開けると、口の中から次々と新たな蛭が飛び出して来るではないか。

もはや腰までびっしりと蛭にたかられたナミちゃんは、パンツに手をつっこみ尻の穴を押さえながら叫ぶ。

「あ！ あなた宇宙人ね！ ナミちゃんがテレビで悪口言ったから、仕返しにきたのね！」

（資料編纂室長、江守友和 参照）

伸恵は悲痛な叫び声をあげる。

「あああ、パンツに一匹、入っちゃったわー！ あー！ 嫌！ 助けてー」

その時であつた。天の助けか。

「これを使って！ 触れるだけでいいわ」

ロリ山田に場所を聞いてかけつけて来たaタイプが、走ってきて

伸恵に電撃ムチを手渡した。

かつて『二十分間の世界』で、友和がぶっ飛んだ事がある、乗馬ムチのような形状の、あのムチである。

そして熱線銃ブラスターを抜き、地面を這う蛭共を掃射する。

——パッパッパッパッと青白い炎と共に、宇宙蛭は焼ける。

「ピュ〜」「ピュ〜」と断末魔の悲鳴をあげた。

怒りに顔を歪めたモータウン田村が、レイ・ガンを抜き撃ちにしようとした刹那、ジューボボボッと燃え上がった。

aタイプがブラスターを撃ったのだ

「さあ・契約を済ませましょう・ぐわっ・契約を・ぐぐわっ・けいやく・ぐぐぐぐわ・・・」

火だるまになって、なおも叫び続けるモータウン田村なのだが、やがて真っ黒く炭化して地面にうずくまった。

伸恵が電撃ムチで地面に叩き落とした蛭を、aタイプはしらみつぶしに焼いて行く。

嫌な臭いが立ち込める。

モータウン田村の、真っ黒な炭になった残骸から、生命力の強い宇宙蛭が5、6匹、長い触手を引きずりながら這い出してくるではないか。

「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」

ああ、気持ちが悪い。実に不気味な光景だ。

すぐさまaタイプはこれを焼き払う。

残骸も焼く。

更に焼く。

モータウン田村だった残骸は崩れ落ち、完全な灰となった。

そしてaタイプは携帯を取り出して、フェロモン号に連絡する。

「緊急連絡、コトミ艦長aタイプです。時空座標SENDAYAMA・6KA地球に、宇宙蛭が発生しました。詳しくは友和さんから聞いて下さい」

携帯型通信機を渡され、友和が喋る。

「えーあのね、銀河連合のモータウン田村って名乗ったよ。連合は、特異点に美女と巨万の富をプレゼントするってね。むにやむにや。俺に解るのは、それだけだよ」

「馬鹿ね」

とコトミ艦長が言った。

「桔梗じゃなくなつて残念でした!」

とふくれつつらのaタイプが言った。

フェロモン号のメインコンピューター、ママが言う。

《先に連合に連絡入れとくわね。――

……モータウン田村はデネブ星系人ね。

連合の諜報員で、これまではずっと、基本的に単独行動ね。

連合も（極秘）扱いだから、データが少ないわ。

……何処で宇宙蛭が寄生したのかは不明よ。

それから、モータウン田村の時空機は、子ノ渡文化会館に陳列されてるわ。

あ、……コトミ艦長、連合から消滅依頼が来たわ》

「了解。OKしといて。aタイプ、休暇中悪いんだけど、宇宙蛭の

抹殺、お願いするわ」

それはコトミ艦長からaタイプへの命令であった。

エスパー友和

パンプキン・クイーンの店内は、うって変わって静まり返っていた。

男も女もオカマもとりんとした目付きで、のろのろと動き回る。宇宙蛭の分泌する催眠物質により、動きが緩慢になり夢心地なのだ。

「昔、連合系の惑星でね、三十パーセントの住民が宇宙蛭に寄生された事があったの」

とaタイプが言う。

「どうなったんだ？」

と友和。

「すぐに連合は熱核爆弾で、全住民を消滅させたの」

「残り七十パーセントの住民は助けなかったのか？」

「宇宙蛭が生き残る危険の方を恐れたのよ。連合ってそんなところなのよ。そうそう、何百年か経って、その星にまた入植が行われたの。放射能を除去してね。そしたら入植者達の中に、また寄生された人が出たの。宇宙蛭ってしぶといのよ」

aタイプはブラスターの熱源カートリッジを交換している。

「おいおいaタイプ、まさかこの人達を、焼き殺すつもりじゃないだろうな？」

と友和。

「仕方ないわ。もう蛭の触手は血管の中をどんどん延びてるの。たとえ蛭本体を電撃ムチで取り払っても、ちぎれた微細な触手からでも宇宙蛭は再生するの。すぐに大きくなって、成虫の蛭になって、分裂を始めるのよ。……お気の毒だけど、こうなったら手の施しようが無いわね」

大口を開けっ放しにして、よだれを垂らして眠りこけている、ママのあぐり。

元々人間離れしているなすびは、くわっと目を見開いたまま眠っている。

ふらふらとさまよい歩く、乙子とちいちゃん。

これを見たナミちゃんと伸恵は、尻を押さえたまま呆然と立ち尽くす。

寝言を言うオカマ。

抱き合っている男とオカマ。

のろのろと財布の金を数えている女。

パンツをずり下ろしている女。

素っ裸になり、ゆらゆらと踊っているオカマ。
などなど。

美しくも、愛おしくもない連中なのだが、このまま焼肉にするのは忍びない。と思う友和であつた。

その友和に、あのムズムズがきた。

「資料編纂室長 江守友和」で、美那子と行ったおでんの屋台で目覚めた、あの感覚。

テレキネシスである。

折よくエスパー友和になったのだ。

「aタイプ、ちょっとだけ時間をくれ。試しにやってみる」

コートを脱いだ友和は、師匠の王先生のように、太極拳の身振り手振りを始める。

「やるぞ、はい！」

まずは、若い女性客に寄生する宇宙蛭から始めた。

背中と性器と大腸に1匹ずつ、3匹が寄生していた。

念動で女の肉体から引き離して行く。

集中力をナノテクレベルまで高めるのだ。

屋台のコンニャクやジャガイモを飛ばすより、遥かに難しい。

やがて3匹の宇宙蛭が、女の肉体からキレイに引き抜かれ、長い触手をぶら下げて浮かび上がる。

「大丈夫だ。ちぎれてないよ。俺には分かるんだ。感じるんだ」

目を丸くしてaタイプが言った。

「友和さん、あなたエスパーだったの？ 凄いわ！」

空中に触手をくねらして浮かぶ、3匹の宇宙蛭のグロテスクな姿に、伸恵とナミちゃんの目はくぎづけた。

友和が叫ぶ。

「よし、要領が解ったぞ。ナミちゃん伸恵ちゃん、フロアの真ん中を空けてくれ。急いでくれ。ナミちゃん、仲間を助けたいんだろ？」

弾かれたように二人は、椅子とテーブルをどかしてフロアに空間を作る。

汗をかき青筋を浮かべて友和は叫ぶ。

「よし、一気に飛ばすぞ！ マルチモードだ。……はい！」

男女の肉体から、オカマの肉体から、宇宙蛭は一斉に引き抜かれ、

長い触手を垂らして浮かび上がる。そして、フロアの空間へゆっくり飛んできて、どさどさつと落ちる。

うずたかく、赤黒く積み重なり、もぞもぞ動きながら「ピュ〜」「ピュ〜」と鳴いた。

「やっつけて！」

と伸恵が叫ぶ。

aタイプのブラスターが火を吹いた。

宇宙蛭はボツと燃え上がり、やがて灰になった。

ナミちゃんは店内の照明を明るくして、この店の閉店を告げる曲『メリージェーン』を流した。

つのだ ひろの唄と、なるもしげる成毛滋のギターが、甘くせつなく流れる中で、男性客も女性客も、店のオカマ達もののろろと起き上がり、身繕いをしている。

男性客の一人がズボンをずり上げながら言った。

「凄いなこの店は。大きな声じゃ言えないけど、アシッド（LSD）だよ。完全にキマったよな。昔、アムステルダムに居た頃にさあ…」

と、大きな声で喋り続けている。

しかし、皆、納得している様子である。

まあ、宇宙蛭に取り付かれた事による催眠作用の体験は、一種のドラッグ体験と言えなくもないのだ。

ナミちゃんが言った。

「違うわよみんな。あの変な大男が、ナミちゃんを掠いに来た宇宙人なのよ！」

みんなが笑った。

天国と世界観

朝だ。素晴らしい朝だ。

aタイプが居るのだ。

ゆうべも、あれから、とっても素晴らしかった。

嬉しい事であり、幸福な事であり、夢のような事であった。

しかし夢ではなかった。

現実到此処に居るのだから。

友和は思わず箇条書になる程、嬉しかった。

何となく滑稽な事でもあった。

似合わないし、そぐわないのである。

ぶつちらかつている万年床の友和のアパートに、世にも可愛いaタイプが同居しているのだ。

例えて言えば、故、実相寺監督のウルトラセブンの話の中で、セブンとメトロン星人が、四畳半でちゃぶ台を挟んで会談を行った時のような、そんな違和感があるのだ。(ずいぶんマニアックな例えだ)

しかし友和は、宇宙コロニー育ちのaタイプと、確かに万年床で一夜を明かしたのである。

それはエロ書きロツカが地団太を踏んで悔しがる程、ウラヤマシイ展開であった。

ゆうべまでは何とか戻って、祝言を挙げたかった安土桃山時代の桔梗の事など、もうすっかり忘れている。

このように友和という男は、まことに都合が良い。

こうなつたら会社なんか行つてられつか！
そんな所に行つてゐる間にaタイプがいなくなつてしまつたら、
いたい誰が責任を取ってくれるんだ！

そんな訳で、分室に電話する友和であつた。

「もしもし、江守です。ああ、分室長、都合により休みます。――
今日はまずい？ え？ 社長と珠美未亡人が来る？ あ！ そう
でしたっけ？

いや、忘れた訳じゃありません。毎年恒例ですもんね。
クリスマスプレゼント持つて未亡人と御子息が来る。

あの方達、筋金入りのメルヘンですもんね。

流石は玩具メーカーの一族つてもんです。

未亡人の事だ、今日の場合なんか、風邪ひいたなんて言つたら、

……此処へ来ちゃつたりして。

……まずいな。

いやいや、絶対休みます。

だから、鳥飼^{とりかい}さん、分室長、館長。あのね、我が家は先祖代々隠
れキリシタンでして、今年は先祖帰りしたんです。

クリスマスは休まにや罰が当たります！

俺も辛いです。

こんな大変な日にすみません。

後で必ず埋め合わせしますんで、何とかお願いします。

はいそれじゃ」

メルヘンババアも、猫又の息子の子猫社長も、糞食らえである。

（資料編纂室長 江守友和 参照）

よし、開放された。

そうだ！ ロマーノに行つて、善行^{よしゆき}にaタイプを見せびらかして
やろう。

aタイプは朝風呂に入っていた。

——ポチャポチャ・パシャパシャ・と湯の音、水の音がする。

「おい、aタイプー！俺もはいるぞー！」

と、速攻で素っ裸になり、浴室に飛び込んで行く友和であった。

aタイプは、天国を運んできたに違いない。

クリスマスのロマーノで、aタイプと楽しいブランチだ。

九条ひとみも、留美ちゃんも、香織ちゃんも、マスターの善行も、目をまん丸くしている。

善行にaタイプを見せびらかしてやろうと、わざとカウンター席に陣取った友和であった。

善行が猫撫で声で尋ねた。

「友和さん、そちらのお嬢様はどちらのお嬢様でいらっしゃるの？よろしかったら紹介して下さいよ」

大いに照れながら友和が答える。

「えー、今日から一緒に暮らす事になったaタイプだ。正確にはゆうべからだけど。皆さんよろしくね」

不思議そうな顔で、更に善行が尋ねる。

「友和、隠し子か？ いや、こんなに綺麗な娘さん、ちっとも似てないし、違うよな」

aタイプが話す。

「こんにちは、友和さんの恋人のaタイプです。――
あら、確かにエステボーヨシユキにそっくり。
名前も同じなんて、クローンかもしれないわ。
ごめんなさい、別に悪気はないのよ。」

……。

私もクローンなの。

クローンのコロニー育ちなの。

みんなaタイプなのよ。

正式にはaタイプ15832なんだけど、数字って嫌じゃないですか。

だからaタイプでいいのよ」

善行は「友和さんの恋人」と聞いたところでぶつたまげてしまつて、頭の中が真っ白になった。

だから、それ以降の話は、まったく意味が解らなかった。

もっとも、ちゃんと聞いていても、意味は解らなかつたろうが。

ひとみにしても「友和さんの恋人」に驚いたのであつたが、とりあえず、この可愛いこちゃんのルックスも声も、気に入ったのであつた。

「ねえ、エータイプさん、フルーツケーキ食べない？　ここで作つたつて言いたいところだけど、雨印食品からの直送なのよ」（善行の前職は、雨印食品の開発部長であつた）

aタイプは嬉しくなつた。甘いものが大好きなのだ。
「わあ、美味しそう。いただきますー」

興味津々の留美と香織がさっそく話しかけてくる。

「ねえ、この黒髪、不思議な光沢ねえ。光の加減でキラキラ光るのね。とっても綺麗！」

「素敵ね！ ハイライトで、お星様が出るのね」

aタイプは益々嬉しくなった。

「アンタレスで買った物なの。お気にいりなのよ。私、地毛がショッキングピンクだから、たまにはこーゆーのも、いいかなーって思ったの」

「うっそーピンク？」

「aタイプさんには似合うかも」

「あら、aタイプでいいのよ」

「aタイプの口紅ってしつとりして素敵ね」

「そお？ これはね、ベガ星系のものなの」

女性の世界観は立派だ。

他人の話を半分しか聞かない事と、解らない事は疑問を持つより忘れてしまいか気にしない事と、美味しい物を楽しむ事と、綺麗な物を愛でる事によって、円滑なコミュニケーションが成されるのだ。

ショッピング

友和は前々から考えていたプランを、実行に移す時が来たと思った。

思い立ったが吉日と言うではないか。

新子ノ渡しんこのわたから、子ノ渡市このわたしの繁華街の近くに引越するのだ。

昼すぎに不動産屋に行き、手頃な賃貸の、広めのワンルームマンションの契約を済ませ、その後、家具屋と家電ショップへ行った。

万年床とおさらばするのだ。

気の早い友和は、今週中に引越して来る事に決め、家具や、憧れのダブルベッドを、そう、セミダブルではないのだ。これを入居日に届くように手配した。

大出費ではあったが、長年実直？ に勤めてきたサラリーマンの友和には、そこそこの蓄えがあった。

三國一の花嫁を貰うのである。

何をけちけち考える必要があるうか。

aタイプの1年間にも及ぶ滞在は、友和にとっては嫁取りにも等しいのだ。

結局、電化製品も最新型の物を選んで注文した。

アパートの物は着替えと本数冊を除いて、全て棄てるつもりであった。

家電ショップの後はデパートへ行き、aタイプの衣料品を思い切り良く、この世界では全く予備知識の無いaタイプの望むままに、ブランド品も含めて、何でもかんでも買ってやった。

そこその貯金は底をつくどころか、たちまち底が抜けて、借り入れまで食い込んだのだが、なあに、生命保険を解約してでも、aタイプを快適に、そして贅沢に過ごさしてやりたいのだ。

だからスッカンピンになっても幸福な友和であった。

「ええがな、ええがな。何でも欲しい物、バンバン買いなはれ」とびつきりいい女を連れ回して何でも買ってやる。いっぺんやってみたかったのである。

これだけ調子に乗った友和である。新車でも何でも買ってしまった、カード破産でもしそうな勢いなのだが、幸いな事に友和はペーパードライバーであった。

だから車までは買わなかった。

それにしても、盆と正月がいっぺんに来たような、生まれて始めての大盤振る舞いであった。

高級レストランでゴージャスな夕食を済ませアパートに帰ると、aタイプは押し入れから、重々しい銀色のバックを引っ張り出した。「1年間お世話になる必要経費よ。足りるかどうか解らないけど受け取って下さい。地球では結構価値があるって、蘭丸さんに聞いたの」

本当にずっしりと重いバックを開けると、なんと、金の針金の束が入っていた。

友和は思わず口ばしった。

「純金なのか？」

にっこり笑ってaタイプが答える。

「うん、原子番号73、元素記号Auよ。オリオンの金物屋なら安いよ」

友和は驚いた。

「十キロ以上はあるな。まったく！ 腰が抜けたよ」
心配そうなaタイプである。

「ごめんなさい。反重力シール剥がしちゃったから重かったでしょ？ 腰、大丈夫？」

友和は笑い出した。

「あははは、いや、本当に、aタイプは、きっと福の神なんだな」

キロあたり、いくらになるのか相場が解らないのだが、相当な金額になる筈である。

とりあえず、彫金の得意な谷垣に頼んで、aタイプとの純金のペアリングを作って貰おう。
と考える友和であった。

カーゴパンツと通勤靴

真夜中である。

買い物に次ぐ買い物の、長いクリスマススの1日であった。

その結果はといえば、口座は借り入れとなり、いよいよ借金生活が始まったと思いきや、文字通り『金』が増えちゃったのだからたまらない。

純金の入った重いバックを撫で回しながら、恍惚の表情を浮かべている、ちよつとキモチ悪い友和なのだ。

「aタイプゝそろそろ寝ようよ」

と、下心丸出しの声を出す。

見るとaタイプは、携帯とテレビと、コンパクトだとばかり思っていた小さな機械をつないで、なにやら難しい顔をしている。

「眠れないのか？」

と友和が聞く。

「友和さん、ちよつとここを見て」

テレビの画面の一点を指差す。

「赤い模様だけど、いったいなんだい？」

「NASAっていう人工衛星からこの街を見てるの。宇宙蛭の宿主になっていた男の時空機がここなの。赤いでしょ。凄い生体反応よ。宇宙蛭がまだたくさんいるのよ」

「凄いな。携帯とテレビとコンパクトで、アメリカの人工衛星が使

えるのか？ ぶったまげたな」

aタイプは素早い動作で素っ裸になると、銀色のぴったりの薄いフード付きボディースーツを身につける。

「耐熱戦闘服よ。放射能も防ぐわ。勿論、蛭もね。友和さんも着て下さい」

要するに防蛭全身タイツなのである。

友和ものろのろと、不器用に全身タイツを付けて、仕上げにピツタリしたフードをかぶる。

これで足の指先から頭まで宇宙蛭の入り込む隙間は無い。

aタイプから熱線銃と熱源カートリッジ2本を渡され、扱い方の説明を受ける。

余談だが、aタイプはこのカートリッジと電撃ムチを、アパートの電源コンセントから充電していた。

「なんだか〇〇7みたいだな。ワクワクするよ。蛭は嫌だけど」

aタイプは全身タイツの上にブラスターのホルスターを肩から下げて、その上にジーンズとジャンパーを着た。

気合い充分の友和も、以前通販で買った米軍払い下げの空軍ジャケットを着て、8ツポケットのカーゴパンツをはく。

空軍ジャケットの内ポケットにブラスターを、左右のポケットにカートリッジを1本ずつぶち込む。

「カッコイイだろ」

と友和はポーズをとっている。

「パンツのたくさんのポケット、蛭で一杯になっちゃったらどうす

るのお？」

aタイプは冗談も言うのだ。

「縁起でもない事言うなよ」

ちよつと考えてから友和は、カーゴパンツの4つの大きな脚ポケットと、それから2つの尻ポケットの中に、以前大量に買った粗塩をギュウギュウにつめ込んだ。

「あー塩は『お清め』に使うからな。蛭とかナメクジってやつは気持ち悪いからな。エスカルゴは旨いけど……これで、なんとなく安心するよ」

この粗塩は、数年前になるが、紀州梅干がやたらと高いのに腹を立て、自家製梅干を大量に、会社の資料編纂室で製造して、ひと儲けてやるうと思いいったのだが、結局面倒臭くなって、それっきり忘れてしまっていたものなのだ。

ガラスの特大容器も十個程あった。

梅干しを漬けようとしたものだが、ハブ酒とかマムシ酒の要領で、「宇宙蛭酒」でも作ったら凄いだろな。……効きそうではあるが、想像しているだけで気持ちが悪くなってきた。

aタイプはゴーグル付きの戦闘用ヘルメットを大きなバックに入れて担ぎ、銀色の格好いいブーツをはいてスタンバイOKだ。

友和は、どうしても、はき古したよれよれのスニーカーをはく気になれず、（蛭の分泌液が浸透してくる感じがするのだ）仕方がないので撥水加工の黒革の通勤靴をはいた。

カジュアルシューズやブーツの類いは持ってないのである。

「カーゴパンツに通勤靴じゃカッコ悪いよな」

十年以上埃をかぶっていたバイクのヘルメットを持って、友和もOKなのだ。

「さあ行くわよ！ 鬼が出るか蛇じゃが出るかって？ 蛭ひるが出るに決まってるもんね！」

単独任務の緊張の為だろう。いつになく饒舌になっているaタイプである。

真夜中の子ノ渡文化会館を目指して出撃する二人であった。

子ノ渡文化会館

完全武装の友和とaタイプがアパートの外へ出ると、一台の車が待っていた。

個人タクシーであつた。

ドアが開き、中から大きなドラ声が響いてくる。

「aタイプだね。早く乗ってくれ」

「タクシー呼んだのか？」

と友和が聞く。

aタイプが口を開く前にタクシーは走り出し、小柄で小肥りのチヨビ髭中年運転手が喋り出した。

「心配するな。コトミ艦長の指令で協力にきたんだ。――」

トランクには高性能爆薬もコンパクトシールドも積んである。

俺は（連盟）えんどつ・ためごろう諜報員の遠藤為五郎だ。

エンタメと呼んでくれ。

（連合）のモータウン田村の事は、半年前まではマークしてたんだ。奴が外宇宙に戻るまでの間だ。

その後、俺もブレアデス方面の任務についてね。

例のヒットラー伍長が方面軍を辞めて、サイボーグの腹心二人にそそのかされて、ナチ党を復活させたんだ。

グローバル・ユニバーサル・ナチス党。GUNPだ。

連盟はガンプと呼び、ヤバさは赤丸急上昇中だ。

ブレアデスではグロナチと呼ばれている。

この二人のサイボーグは、フェロモン号が助けたんだってな」（NKSRの世界 参照）

友和にとっては、党首やヘスと別れたのは、つい二ヶ月前の出来事だったのだが、その後、何年か何ヶ月か解らないが、とにかく時空を遡って（お宝惑星）に着いた事になるらしい。

このように、高度知性体の飛び回る銀河系世界においては、過去、現在、未来など、我々が常識的に認識している時間の流れの概念では、到底推し量れない現象が、往々にして起こるのである。

けっして阿呆な作者が、話の脈絡を忘れてしまったからではないのだ。

エンタメは運転しながら話を続ける。

「グロナチはブレアデスでは大変な人気で、入党者続出なんだ。ブレアデス愛国戦線なんかと手を結んで、またぞろ分離独立運動に発展するんじゃないかって、お歴々はピリピリしてるんだ。そんなこんなで俺も、帰ってきたばかりなんだ」

どこから見ても、熾烈な謀報戦の渦中にいる人物とは思えない、モツサリとした感じの遠藤為五郎なのである。

しかしてその正体は、連盟謀報部の幹部と連盟軍の一部の幹部、或いは245ヶ星系独裁官ミナコ直属の、特殊任務専門であるフェロモン号のコトミ艦長（245ヶ星系軍、準将）そのあたりの人間しか知らない。

腕っこきの（連盟）スパイとして、その筋には恐れられている男なのだ。

「モータウン田村は地球でも人間を雇っていたからな。外宇宙から帰って来て、また接触したと考えると、その人間が宇宙蛭の母体になってる可能性は大きいな。女一人は解ってるんだ。若い女だよ。」

他にも何人かいる筈なんだ」

タクシーは子ノ渡文化会館に着いた。

エンタメが言った。

「どうする？ aタイプ。難敵だぞ。偵察に留めておいて、後日コマンド部隊を送り込んだ方がいいと思うがな」

コンパクトシールドをチェックしながらaタイプが答えた。

「威力偵察って事よ。状況次第ね。無理をするつもりは無いわ。でもね、コマンドが到着する前に（連合）は爆撃しちゃうかもしれないわ。この街は休暇の間、滞在するつもりだから、消滅させる訳にはいかないわ」

「確かに（連合）だったらこの街くらい、躊躇せずにすっ飛ばすなところであんた、俺の顔に見覚えないかい？」

そうだ。最近いつも、文太橋の大通り寄りのたもとの、おでんの屋台で飲んでいる親父じゃないか。

世の中は狭いのだ。

aタイプが紹介してくれた。

「この人が特異点の江守友和さんよ」

チヨビ髭のエンタメが言う。

「ほう、今回の蛭騒動、特異点まで関係してるのか？」

エンタメは、難なく子ノ渡文化会館の警報システムを解除して中へ入って行くと、件の時空機の前に立つ。

昔のオート三輪くらいの大きさの、笑っちゃうようなキッズなデザインデの宇宙船なのだ。

展示してあるこの宇宙船の、脇の垂れ幕にはこう書いてある。

『空想から科学へ！ 子ノ渡市、夢の宇宙船展。飛びま賞。入賞作品。』

子ノ渡市在住、モータウン田村氏寄贈。協賛、ララミー玩具』

「うちの会社が協賛してたのか。ちつとも知らなかった」

エンタメが得意技を披露する。

「磁気ロックか、成る程ね。ちょいちょいとね、——よしはずれた！ …… 気をつけてな、可愛いこちゃんに特異点のダンナ」

エンタメにうながされて突入体勢をとるaタイプであったが、友和はポカんとつつ立ったままだ。

「友和さん行くわよ！ 覚悟はいい？」

ブラスター

熱線銃を握りしめ、もう一方の手を添えて、まるでXファイルのスカリー捜査官のようだ。

モルダー捜査官になりきれない友和が質問する。

「お二人さん、素朴な質問をさせてくれ。このオート三輪、こんなに小さいし、中の運転席、いや操縦席つてのか？ まる見えじゃないか。しかも誰もいない」

二人は苦笑する。

エンタメが答えた。

「特異点のダンナ、覚えておいた方がいい。『折りたたまれた空間』
って言うんだ」

「入れば解るわ」

と言ってハッチを開け、aタイプが突入した。友和も続く。

中はただっ広かった。

高い天井を見上げると体育館並の広さである。

床から2メートル位の高さまでは金属性の間仕切りが、まるで迷路のように続いて行く。

映画エイリアンの宇宙船の中のような、工場っぽくて不気味な感じだ。

こんな所で宇宙蛭が、四方八方から襲ってくると考えるだけで、もう友和はちびりそうである。

船内を慎重に進んで行くと、急にaタイプが立ち止まった。

「まずいわ、シールドよ。友和さん触れちゃ駄目よ」

「ひとつ走り行って、エンタメさん呼んでこようか？」

「しっ、あれを見て！」

と、aタイプの顔がこわばる。

ゾンビ

見なければよかった。

モータウン田村の場合は、やはり気持ちが悪かったのだが、コート越しであった。

しかしその女は腰部に、スカートだったものなのか、下着だったものか、判別のつかない黒ずんで汚れ切った布きれを、わずかに残しただけの、すっ裸なのであった。

だがそれは、ほんの僅かな救いでもあった。
何故なら、陰部を見なくてすむからだ。

蛭の巣と化したその肉体の首から下は、乳房も腹も背中も尻も脚も腕も、全身、蜂の巣状に満遍なく穴が穿たれ、さながら、蜂の巣に群がる蜂の群れのように宇宙蛭が這い廻り、血膿の滴る穴から出入りしているのだった。

じゅるじゅると触手を引きずりながら。

首から上、すなわち顔はそのままなのだが、養分を取られ続けたせいだろう、青黒く萎びていて、老婆のようである。

毛髪に混じってちぎれた触手が垂れ下がっているのだが、生きている触手は風も無いのにゆらゆらと浮かび上がり、この世のものは思えぬ嫌悪感を醸し出す。

女の年齢を窺い知る事など到底不可能である。
くわっと見開られた目玉が虚空を見据える。

無惨に崩れた唇が、歯茎を剥き出しにして大きく上下に開くと、

口腔の中からぞろりと蛭の触手の束が垂れ下がる。

「ひえ~~~~~！ aタイプ！ あんなの、ありかー？」
と友和はaタイプに抱きついた。

「ふわあ。お腹へったのにイ……食欲が、ぜんぜん無くなっちゃったア」

とaタイプも友和に抱きつく。

まさしくゾンビだ！ 在いは、凸凹木乃伊。
デコボコミイラ

悲惨の極みであり、おぞましさの塊であった。

その女、恐怖の蜂の巣状のゾンビ女は、こちらに気付いた様子だが、攻撃を仕掛けてくる訳じゃない。

蛭の死骸やら腐った触手の残骸やら、血膿で汚れ切った床を、股間から大量の触手と蛭の死骸をぶら下げて、ずりずりと引きずりながら、歩き回っては、こちらを凝視したりする。

磁気シールドは、向こうからの攻撃をも不可能にするのだ。

この、信じられないような汚濁の光景に、血も凍る思いの二人であった。

「……おい、あれが」

「うわっ！」

「きゃあー！」

と、二人は腰を抜かした。

いつのまにかエンタメが後ろに来ていて、話しかけてきたのだ。吐き気と鳥肌が止まらない二人は、エンタメに文句を言う気力さ

え無い。

エンタメが話を続ける。

「あれが田村の恋人の、地球人の女の成れの果てだ。大恋愛の末に結び付いた。絶世の美女だったんだ。年の頃は、そう、女の色香匂い立つ二十六歳だ。哀れなもんだな」

やっとの思いで友和が喋る。

「よ、よくご存じで」

エンタメがさらりと言つてのける。

「あははは嘘だよ。俺が知る訳ないだろ？ 本当は田村の母親かもな？ 何故なら、……ババアの顔をしている。ってな。よく見てみる！ ……だんだん見慣れてくると……やっぱり気持ち悪いな」

エンタメのお蔭で少し、こわばりが抜けた二人であった。

「よし、どうする？ ヘルメット持ってきてやったぞ。忘れていったろ、お二人さん。ダンナにはこれをやる。通信機能付きだ。あんなバイクのメットじゃ駄目だよ。じゃ、行こうか戦友」

aタイプが目丸くする。

「エンタメさん、コマンドじゃないあなたが、行く事ないのよ。シルドさえ外してくれたらもう充分よ」

タクシーの運ちゃん変じて、土建屋のオッサンといった感じのエンタメが、測量で使うトランシットみたいな機械をいじりながら喋る。

「ま、俺もね、この街とは縁が深いんだ。だから（連合）にすっ飛ばされちゃ、ちょっと困る。さっさと片付けようぜ。それ！ シー

ルド解除だ」

ブラスターを握りaタイプが踏み込む。
続いてエンタメ。

へっぴり腰の友和が後に続く。

ゾンビ女は以外に素早い動作で奥へ逃げる。
死角に注意を払いながら三人はこれを追う。

ゾンビ女が立ち止まり、振り返る。

にやっと笑ったように見えたのだが、気のせいだろうか？

次の瞬間、床が下にパツクリと開いて、三人は3メートル程の穴
に落っこちた。

「うわっ」

「きゃー」

「いつてー」

友和は、したたか腰を打った。

「痛ってて。くそっ俺はいつも腰だ」

「落し穴とは恐れ入ったな。ダンナ、大丈夫かい？」

「声が反響するわ．．するわ．．するわ．．ヤツヤツホツホツオオ．
．．エーエータイイプウウウ．．タイイプウウ．．友
とも和かずさあああんん．．さあああんん．．面おも白
しろいいわあああ．．わあああ．．わあああ．．わああ
．．」

蛭地獄

何かの格納庫なのだろう。
ほぼ立方体の穴であった。

穴のへりからゾンビ女が顔を見せた。

続いてゾンビ男が、更にもう一人、ゾンビ禿げ男である。こいつは、禿げゾンビと言おう。

ブラスターを警戒して、すぐ顔を引っ込める。

どうやら三人いたらしい。

ゾンビーズだ。

今度は確かに笑っていた。

しーんと静まりかえっている。

嵐の前の静けさとは、きつとこの事だろう。

「ダンナ、そろそろ来そうだな。磁気コーティングしてるから、絶対発砲しちゃ駄目だぞ。エネルギーが壁に跳ね返って、全員お陀仏になる」

「来る！ 確かに来るよ！ エンタメさんどうしょ？ もうすぐ来るよ。あわわわ、心の準備が……あわわわわ」

「あゝんあゝんあゝ 友和さゝんさゝん 怖いわゝわゝわゝ 嫌だわゝわゝわゝわゝ」

落とし穴の真上に位置する天井には、ダクトの太いパイプがによつきり伸びていて、真下に曲がった端っこは、まるで大きな水道の

蛇口のような。

その直径四十センチ程の蛇口が友和達を睨んでいる。

まさにそこからであった。

大量の宇宙蛭が途切れる事なく降ってきた。

——ザザ〜ザザ〜ザザ〜ザ〜ど〜ど〜ど〜ど〜ど〜どザザ〜
ザ〜ザザ〜ザ〜ザザ〜どど〜

蛭共が鳴く。

「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」
「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」

「ひえ〜気持ち悪い！」

「助けてくれ〜！」

「友和さん！」

「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」
「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」

たちまち蛭の群れは腰まで溜まった。

更に蛭は胸まで達した。

そして、首まで蛭に埋まったところで、やっと止まった。

いったい何匹いるのだろうか？

蛭の総攻撃、物量作戦である。

蛭また蛭また蛭また蛭また蛭また蛭……。

防蛭タイツを着用してヘルメットをかぶっているのだが、気持ち

悪い事おびただしい。

金属にも等しい防御力を誇るタイツなのだが、蛭共はなんとか潜り込もうと、凄い力で頭をぐりぐりと擦り付けるのだ。

——ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐり……

エンタメが強がりと言う。

「宇宙蛭の全身マッサージだ。これは……効くなあ」

友和は半泣きだ。

「うわあ気持ち悪い。猫ならいい、鼠だって蛙だってバツタだって蛭なんて宇宙蛭なんて、あんまりだよー！ わっゴーグルにくっついた。グログロだあ、まったくひでえ形だ。おえ、おえ、うっぺっぺー」

aタイプは、あまりの汚辱感と悪臭に、ぐったりしている。

三人は宇宙蛭に埋まり、揉まれに揉まれる。

気持ち悪いなんてもんじゃない。

まさに蛭地獄であった。

やがて、友和の脚にまとわり付く蛭の勢いが、何となく衰えてきたような感じがした。

「おや？ これは……。塩だ。粗塩が効いてるぞ！」

友和は、カーゴパンツの4つの大きな脚ポケットと、2つの尻ポケットのふたを開け、蛭に粗塩がよくまわるように、じたばたと足を動かして腰を振る。

こうなったらもう、踊ってやるっじゃないか。

「はあゝ昼（蛭）も夜もゝ君が好き〜と。ぐっちょんぐっちょん、
こんちくしょ〜ときたもんだ〜」

確かに粗塩は宇宙蛭を溶かしているのだ。

やっと手足を動かす事が出来るようになった友和は、踊りながら
粗塩を握り、aタイプとエンタメの回りにもふりかける。

「さすがは特異点だ！ ダンナ、恩に着るぜ」

「友和さんがんばってー！」

「それより、2人とも踊ってくれ。ぐっちょんぐっちょん、すり潰
すんだあ。あゝ気持ち悪い。ひゝひっひひ」

そして、とにかく三人はじたばたと踊りまくるのだった。

粗塩がまわってきて蛭の動きが緩慢になってくる。

そして溶けた蛭は他の蛭の重みでどんどん沈み込む。

ひたすら踊り、ふりかける友和なのだ。

「ビュイ」

「ビュイ」

「ビュイ」

「ビュイ」

「ビュ」

「ビ」

「……」

蛭共は断末魔の悲鳴をあげた。

そして、程なくそれも止んだ。

溶けた蛭の体液で全身べとべとの三人は、とても臭くて、もうゲ
ロゲロだ。

絶対絶命！

粗塩により、宇宙蛭は溶けてしまった。

立方体の穴の中は、溶けた蛭の黄色味がかった乳白色の体液が、どろりと腰のあたりまで溜まっている。

液化化した事により、だいぶ膏^{かさ}が減った。

全身が宇宙蛭の体液でずぶ濡れの三人は、気が遠くなる悪臭の中で、この、言わば蛭汁をかき回して、床に落した熱線銃^{ブラスター}を捜している。

天井のダクトの穴を恐々見上げながら友和が言った。

「また降ってきたら、どうする？」

「ねえ、エンタメさん、これは仕掛けられた罠でしょ？　これだけの数の宇宙蛭の宿主が、何処かにいるって事なの？」

「さあな？　だけど、ゾンビみたいなのが何百人もいるとも思えない」

宇宙蛭の本能は本来、宿主に寄生して宿主の脳を使って思考し、子孫繁栄と勢力拡大に邁進するものである。

宿主が高脳なら高脳なりに低脳ならば低脳なりに、最良の方法を考えるのだ。

友和達は運が良かった。

もし敵が、高脳なデネブ星系人のモータウン田村のような奴ならば、すでに一巻の終わりであつたらう。

反重力カートの格納庫を「落とし穴」に改造して、天井のダクトの穴から蛭の大部隊が降ってくる仕掛けを作ったのは、モータウン田村に寄生した、つまり高脳化した蛭共であった。

現在うろろしているゾンビ女達三人は、ごく普通の地球人であり、いや、それより遥かに低能化しているのだが、これには訳があった。

飢餓である。

友和達が蛭地獄と呼ぶ、この『折りたたまれた空間』なのだが、此处は蛭共にとっても、凄まじい飢餓地獄であったのだ。

宿主の肉体に巣くう蛭共はまだ随分ましな方なのだが、飽和状態をとつくに越えた寄生事情は、慢性的な飢餓状態を引き起こし、一番大事な特質である「宿主の脳を生かす」という宇宙蛭にとっての戒律さえ、こつそりと破ってしまうのだった。勿論、他の蛭に悟られないように。

つまり我慢出来なくなった蛭は、脳みそを少しでも触手で舐めしてしまうのである。

その結果、この不屈きな蛭共に脳みそを少しずつ舐め盗られた宿主は、本来の知能よりだいぶ低能になってしまった。

さて、ゾンビ女達に寄生している蛭共は、宇宙蛭の大部隊が友和の粗塩によって全滅した事が、まだ理解出来ない。

低能なのだから仕方がない。

大量の仲間が何故だか消えてしまって、人間達は宿主になつてはいない。

だからといって殺してしまつては寄生できなくなる。
しかし思いのほか危険な感じもする。

ふぐは食いたし命は惜しいのだ。

「とにかく穴から出さないようにしなくちゃ
と考える。」

そこでレイガンを滅多やたらと撃ってきた。威嚇射撃である。

友和達は穴から這い出そうとするのだが、ゾンビ女とゾンビ男と
禿げゾンビは、レイガンを間断なく発射する。
顔を出すどころじゃない。

やがて、事態が解ってきた蛭共は、
「この恐ろしい敵を殺らなければ、こちらが殺られてしまうかもしれない」

と考え始めた。

撃ちまくりながら前進してきて、穴の中に撃ちこまれたら、それでジ・エンドなのである。

三人は、まさに絶対絶命となった。

ところで飢餓地獄の宇宙蛭の事だが、先程宿主の肉体に巣くう蛭
共はまだましな方だと書いた。

まさにその通りなのだ。

こいつらは宇宙蛭の貴族とでも言つべき奴らだ。
では宇宙蛭の平民はどうなのだろうか？

ここで『折りたたまれた空間』の世界での、ある平民蛭の話をしよう。

突然変異体の話なので、特異点江守友和にあやかってトモカズと

名付けたいのだが、それだけは絶対に嫌だ！ 勘弁してくれ。と、
本人が頼むのだ。

仕方がない、ムサシと名付けよう。

これまでもそうしてきたのだが、宇宙蛭の形態の説明はあえてしない。

アマゾン産の蛭のようなものを想像してもいいし、お蚕さんのようなものを想像してもいいだろう。

最も気持ち悪いものを想像してもいいし、アニメのような可愛いらしい奴を想像してもらっても結構だ。

大体、こんなに長々と宇宙蛭の話を書いている事自体がおかしな事なのだ。

自分でも何故、宇宙蛭の話なんか書いているのか皆目解らないのだ。

こんな事を考えていても、酒の肴が不味くなるだけじゃないか。
答えはひとつしかない。

私自身が宇宙蛭に寄生されているに違いないのだ。

「おや？ 何か、音がする。……だんだん近づいてくる」

「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」
「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」「ピュ〜」

私は恐怖の叫び声を絞り出す！

「しえ〜〜〜〜〜〜〜！」

蛭のムサシ

蜂のムサシならぬ、蛭ひるのムサシは、この不浄の極みであるグロテスクなんてもんじゃない、本当にグログロな世界の中に生まれ出た。

熾烈な餌の争奪戦のさなか、比較的競争の少ない排泄物から栄養を取って、ひっそりと生き延びてきたある平凡な宇宙蛭が、部屋の隅で分裂した事により生まれたのだ。

生存競争は厳しく、栄養元はこのあたりでは、もっぱら共食いだ。弱い奴、弱った奴を見つけると、躊躇せずに食ってしまう。貴族蛭の住み付く？宿主の肉体？なんて、夢のまた夢なのだ。

貴族社会で脱落した奴が、未練たらしく、まだ水気たっぷりの触手をたなびかせながら、ゆっくりと落ちてくる。

ムサシはさっそく出かけて行き、他の平民蛭共とこれを取り囲み、そして貧り食ってしまう。

飢えが続くと、何となく気の合うダチの蛭と誘い合って、通りすがりの蛭を襲って食ってしまう。

これはいい。強そうな大きな蛭でも、若くて元気な蛭でも、仲間と力を合わせて襲いかけると案外楽勝じゃないか。

こうしてムサシは、このあたりの蛭のアニキ格となった。

「おい、野郎共、宿主に寄生している貴族の奴らな、おら達と同じ蛭のくせに贅沢しやがって、憎ったらしいだ。おらは死ぬ前にいっぺん、宿主から栄養を取る為に、思いつきり触手を延ばしてみたかっただ」

「アニキ、おら達もお供しやすぜ」

こうして上昇思考が芽生えた蛭のムサシと舎弟共は、宿主である？ 禿げゾンビ？の、ふくらはぎ及び太ももに巣くう貴族蛭に、殴り込みをかけたのであったが、あっさりと蹴散らされてしまった。

舎弟共はほとんど、貴族蛭の宿主である？ 禿ゾンビ？に、踏み潰されてしまった。

無惨に殺された舎弟蛭共を、他の平民蛭と一緒に貧り食いながら、「いつの日か必ず復讐してやるぞ！」

と蛭のムサシが思ったかどうかは、定かでない。

ともあれ、その後暫くして、変化が起こったのだ。

本来ならとくに分裂を始める程、大きくなっていた蛭のムサシであったが、何故だか分裂を始めない。

そのかわり、粘膜質の皮膚が妙にだぶついてきた。

そして触手は骨組みのようなものに変化してきて、だぶついた皮膚がぴんと貼り付き、見事な羽が出来上がったのである。

ぶるぶると身体を震わせて、最初の「飛び蛭」である蛭のムサシは飛びたった。

そして初飛行を終えたこの変異体である蛭のムサシは、遅ればせながら、分裂を始めたのであった。

蛭のムサシの分裂はそれっきりだったのだが、その時生まれたムサシの片割れであるコジローは、同じ特質を受けつぐ「飛び蛭」だったのだが、よく食い、よく分裂した。

コジローから分裂した子供の「飛び蛭」たちも、よく食い、よく分裂した。

こうして「飛び蛭」の一族は、その数を増やしていった。

そろそろ寿命が近づいてきた蛭のムサシは、気まぐれによく飛んでいたのだが、宿主に巣くう貴族蛭共は、さして気にとめる様子もなかった。

そして、その時がきた。

蛭のコジローが子供達、孫達、ひ孫達を前に言う。

「今日は蛭のムサシのじっちゃんから、皆に大事な話があるだ。皆よく聞いてける」

蛭のムサシが言う。

「おらあは、そろそろ寿命だ。もうすぐおつ死ぬだ。おら、いつつも飛びながら貴族の宿主を見てたけども、一番旨そうな場所がガラ空きになってるだ。いつつもいつつも考えてたんだけんど、年取つてやっと、その意味が解つただ」

若い飛び蛭がじれつたそうに言った。

「じっちゃん、じらさないで、さつさと教えてけんろ」

そこで蛭のムサシは高らかに宣言したのだ。

「孫共、ひ孫共、よく聞け！ 貴族の宿主の一番いいところ（頭部）は、おら達飛び蛭一族の物だつて事だ。遠慮はいらねえ。皆で食っちまえ！ おらあに続け！」

「そうだったのか！」

「じっちゃんに続け！」

プルプル！ プルプル！ と、「飛び蛭」たちの羽が震える。

「ピュー」「ピュー」「ピュー」「ピュー」「ピュー」「ピュー」「ピュー」

「ピー」

「飛び蛭」たちは、いつせいに飛び立った。

目指すは貴族蛭共の宿主であるゾンビ女の、ゾンビ男の、そして、かつて舎弟共を踏み潰した？ 禿げゾンビ？の頭部であった。

焼き尽くす

落とし穴から這い上がってはレイガンに掃射され、命からがら黄色味がかった乳白色の蛭汁に、またぞろ飛び込むはめになる。

これを何度も繰り返し返して、友和達三人は、とうとう諦めてしまった。

精も魂も尽き果てたのだ。

だから、立方体の穴の隅に、蛭汁にどっぷり浸かりながら、座り込んでいる。

「友和さんテレキネシスは使えないの？」

「駄目だ。ムズムズが来ないんだ」

「役にたたん特異点だな！」

勝ち誇るゾンビ女がレイガンを手に覗き込んだ。ゾンビ男と禿げゾンビも、そのグロテスクな顔を穴のへりから出して、友和達を凝視する。

それからおもむろにレイガンの狙いを定める。

——嗚呼、人生よさらば！ まあこれはこれで馬鹿馬鹿しくも楽しかったな。生まれ変わったら独立独歩の、親父以上の泥棒になるう。

——フェロモン号のみんな、コロニーのみんな、さようなら。欲を言えばきりがないわ。

——こん畜生！ 冗談じゃない！ こんな所で、臭い蛭汁まみれで、もううんざりだ！ さっさと殺ってくれ！ 馬鹿野郎！ 阿呆ったれ！ 糞ったれ！ ボケナス！ カボチャ！ えーとそれから

……

三者三様に死を覚悟したその瞬間であつた。

「ぎゃひ」

「ぐえ」

「ぐひゃ」

と、宿主達の声帯から、激しい悲鳴がほとばしった。

蛭のムサシを先頭に「飛び蛭」一族が、宿主達の顔面に猛然と襲いかかったのである。

蛭のムサシは？ 禿げゾンビ？の眼窩に深々と突き刺さった。

「ギエ」

叫び声をものともせず、目指すは当然、最も旨そうな脳みそだ。

ゾンビ女もゾンビ男も、眼窩といわず口腔といわず「飛び蛭」が、突き刺さっている。

やがて首から上に次から次と、隙間なくへばり付いた飛び蛭共は、顔も頭も首筋も、貧り食ってゆく。

もんどりうって倒れる宿主達であつた。

ここぞとばかり穴から飛び出した友和達のブラスターが、盛大に火を吹いた。

——ジュボボボボー

宿主も、貴族蛭も、平民蛭も、飛び蛭も、全てを焼き払ってやるのだ。

「ぎええええ〜」

ゾンビ女の声帯から断末魔の叫びが絞り出される。

その時、友和は確かに聞いたのだった。

ブラスター
熱線銃でゾンビ女の残骸を焼き尽くしながら、エンタメが小さな声でつぶやいたのを。

「かおるちゃん。遅くなってごめんね」

エンタメの汚れ切った頬を、二筋の涙が伝い落ちる。

エンタメにとっては、長年に及ぶ好敵手であるモータウン田村の、「弔い合戦」だったのだ。

地球にいるときには、お互いに機密を隠しながらも、そこそこの良い付き合いが続いていた。

エンタメとモータウン田村は、酒と女とスリルを愛するロマン派のスパイであった。

もっとも下戸の田村は、そのぶん女を愛したのだが。

友和とaタイプに話したモータウン田村の恋人の話は、本当の話であり、かおるちゃんはエンタメにとっても、大切な友人だったのだ。

だからこそ、この突入に参加したのである。

「撃ちかた止めーい」

エンタメが妙に堂々とした号令をかけた。
更にこう言った。

「ご苦労さん。あとは俺の仕事だ、安心して任してくれ」

aタイプは不満である。

「だってこの仕事は、私がコトミ艦長の命令で……」

「解ってるよaタイプ中尉。ここから先は情報部の仕事が優先だ。色々調べなきゃならん事があるんだ」

エンタメはポケットから、何やらカードを取り出してaタイプに見せた。

aタイプは、はじかれように、きおつけの姿勢をとって敬礼する。

「わかりましたっ！ 大佐殿」

エンタメは情報将校だったのだ。

「なんでえ軍人だったのかよ。しかも偉ぶつじゃねえか」と、面白くない友和が毒づく。

「まあ怒るなよダンナ。〇〇7だって軍人なんだし、俺くらいの事情通になれば、秘密をいっぱい知ってるからな。適当に出世させておかなきゃ、お歴々も安心できないんだよ」

と、笑いながらエンタメが言った。

探索

『折りたたまれた空間』の中での探索は続く。

「さて、ざっと見渡したところでゾンビの大部隊の気配は無しと…
…問題は、あの天井のダクトの先だな」

とエンタメ大佐。

友和はさっそく弱音を吐く。

「そろそろ俺、おいとましくちな。今日は会社さぼっちゃった
しな」

軍人二人は、かまわず探索を続ける。

「大佐、このハッチ、なんだか怪しいわ！」

「食糧庫だな。成る程、読めてきたぞ！」

「あ、急に用事、思い出しちゃった。悪いけど俺、先に帰るよ」
軍人二人は友和を完全に無視している。

「大佐、駄目です。磁気ロックです」

「わ！ aタイプ、開けるなよ。開けなくていいよ。なあ、後は大
佐殿にお任せして、帰ろうぜ」

エンタメが小道具を取り出した。

「よし、何が出るかな？ お楽しみだ。……ちょいちょいとね」

「あわわわっ！ エンタメさん、やっぱり開けるの？ やめといった
ほうが……」

ブラスターを手に身構えるaタイプと、へっぴり腰の友和の前で磁気ロックは外され、ハッチは静かに開いた。

「ブモオオー」

牛が鳴いた。

確かに牛なのだ。

しかも、その牛は巨大な牛であった。

アフリカ象ほどはあろうか。

これが、だだっ広い食糧庫の中の金属の柵に、十頭も囲われているのだ。

「これが宇宙蛭の大部隊の宿主だったって訳なのね」

「そうだaタイプ。有名なデネブ牛だよ。銀河グルメ年鑑にも載ってる」

当然の事ながら、牛の身体は穴だらけであった。

まるで腐肉やチーズにたかる蛆虫のように、大部隊の出撃に参加しなかった留守番部隊の蛭共が這いずり廻っている。

「うわあっ、やっぱり穴ぼこだらけじゃないか！ あーもう、何もかも気持ち悪い！」

と、とつくに腰を抜かしている友和が叫んだ。

「見るよダンナ、床に穴が開いてるだろ？ ここがダクトの入口だ。落とし穴のふたが開くと同時に、デネブ牛に電流が流れる仕組みなんだ」

「解った。すると蛭共はビックリして牛の身体から飛び出して、穴を直指してまっしぐらって？ あははは、まるで小学校の理科の実

験じゃないか。まったく、高脳な銀河連合の諜報員が、聞いてあきれよ」

「だけど友和さん、結果は恐ろしいものだったわ」

「まあ、ダンナ、情報戦とか破壊工作ってのは、ふたを開けてみれば意外と単純なもんなんだよ」

三人のブラスターが火を噴いた。

牛も蛭も黒こげとなり、やがて真っ白な灰になった。

「匂いは旨そうな焼肉の匂いなんだけどな。そういえば腹減ったな」と、友和は立ち直りが早い。

「そりやそうさ、ダンナ。最高品種のシモフリデネブ牛なんだ。なにしろモータウン田村はグルメだったからな。子ノ渡市でおるぢやんと、焼肉屋を始めるつもりだったかもしれないな」

やがて三人はコクピットにたどり着いた。

aタイプは宇宙蛭の残存勢力や、はぐれ蛭を見つけては焼き払っている。

「見てくれよ。泣けてくらあ」

エンタメがしめっぽい声を出す。

綺麗な女の立体写真が飾ってあった。

友和が尋ねる。

「エンタメさん、これが、あの？」

「そうだ、アレだ、あの化け物だ。やっぱり、かおるちゃんだったんだなあ。ちくしょうめ。おっダンナ、これ見てくれよ」

百円ライター程の大きさの、何かのソフトらしい。

エンタメがスロットに差し込み、再生した。

——遠藤為五郎著・高性能爆薬による『折りたたまれた空間の爆破方法』

やり損なったら水爆十発分の大爆発！ ぜひ君も挑戦してみよう。

「あの野郎。（モータウン田村）正気のうちは、この時空機の始末をつけようとしてたんだなあ。それにしても、俺の本を持ってるなんて、嬉しいじゃないか！」

aタイプが飛んできて、さっそくゴマをする。

「わあゝ凄いですね大佐殿、本まで出してらっしゃるんですかゝ。さすがですっ」

友和は面白くない。

「aタイプ、蛭だろ、蛭、しっかり見張って大佐殿をお守りするんだろ？」

「何よー。友和さん、ヤキモチ焼いてー」

「よーし、これだ。フライト・レコーダーだ。別名ブラック・ボックス。宇宙蛭が何処で付いたか解ればいいがな。再生してみよう」

固唾を飲んで見守る三人であつた。

民意の尊重

エンタメこと連盟軍情報部の遠藤為五郎大佐は、モータウン田村の时空機のコクピットで、フライトレコーダーを再生した。

友和とaタイプは、固唾を飲んで見守っている。

——大男のモータウン田村が、かおるちゃんの立体写真の前で、悩ましいポーズでくねくねと踊りながら唄っている。

（♪かおるちゃん♪遅くなつてゴメンね♪かおるちゃん♪遅くなつてゴメンね♪花を捜していたんだよ~~~~~花は花は花は遅かった〜♪）

ひざまずき、立体写真に投げキッスを送っている。

「モータウン田村って、こんな奴だったのか……」
と友和。

「日付から推察すると、地球へ帰って来る途中だな。宇宙空間を飛行中だ。一ヶ月前だ」

とエンタメの解説。

早回し

再生

平凡な光景。

早回し

再生

（こんばんわ〜）

という声とともに、ハッチが開いて綺麗な女が入って来た。

（星間デリバリーヘルス、ミルキーウェイのaタイプです）

ケバめの化粧で悩ましいコスチュームを着ている。ひとめで商売

女だとわかる。

しかもこの女、aタイプじゃないか。

「aタイプ、何故ここにいる？　どういう事だ？」
と友和。

「わははは。確かにaタイプだ」
とエンタメ。

「私じゃないもん！」
と赤くなつたaタイプが言った。

aタイプはクローンであり、aタイプのコロニーで生まれ、育つのだ。

現在コロニーでは五千人程が暮らしていて、二万人程が銀河のあちこちで働いているという。

看護婦や接客業などに就業する者が多いという。

中尉のように軍人になるaタイプは、変わりダネ中の変わりダネなのだ。

そうしてみると、風俗業には結構多いのかもしれない。

画面の中の、色気たつぷりのaタイプが言う。

（ねえおじさん、出したいの？　感じさしてくれるの？　一緒に感じたい？　どれにする）

モータウン田村が鼻息を荒くして言った。

（全部だ！）

交渉成立のようだ。

女はヘッドホンのような物を取り出して、モータウン田村にかぶせ、自分もかぶる。

エンタメが鼻息を荒くして言った。

「おつ、互感器だ。俺も持つてるよ。ダンナ、後で貸してやるのか？ aタイプ、あんたも持つてるかい？」

「そんなもの、持って無いわよ！」
と、ふくれっ面のaタイプである。

画面では、人工重力を停止して無重力状態となった二人の、強烈な、『淫らまんだら』が始まっている。

「あーん。このaタイプ……もお……エッチ！」
とaタイプ。

「わはははは」
とエンタメ。

友和だつて、脇のaタイプと画面の中のaタイプを、思わず見比べてしまう。

「ところで、何となく想像できるけど、エンタメさん、互感器ってどんな物？」

と友和。

「セックスの時、お互いの感覚が解る器具だよ。男はびっくり！ 女はがっかり！ ってなもんだ。な、aタイプ」
とエンタメ。

「大佐、友和さんに変な事ばかり教えないで下さい」

と、エンタメを睨むaタイプである。

エンタメが声を潜めて、友和に言った。

「驚くぞダンナ、女ってこんなに凄く感じるのかってな。そりゃ凄
いもんだ。逆に女は、男ってこの程度のものなの？ わははは。な
ら、男はどうしてこんなに助平なんだろう？ 互感器では説明がつ
かん。うん。宇宙の七不思議だな」

ナマツバを飲み込みながら友和もひそひそ声になる。

「エンタメさん、後でこっそり互感器、貸してよ」

「OK。帰ったらおでん屋で渡すからな。お楽しみ」
男同士の会話なのだ。

画面ではモータウン田村とaタイプが、更に激しく、『くんずほ
ぐれつ』の熱演中だ。

「中尉、画面の中に蛭がいないか見逃さんようにな。しっかり見張
ってくれ」

と笑いながらエンタメ。

「いや〜んばかあ」

手で顔を覆いながらも、指の隙間からしっかり見ているaタイプ
であつた。

ところで蛭汁まみれの戦いがすんで、焼き払った高熱で蛭汁に浸
かった服は乾き、パリパリになつていた。

顔も身体も蛭汁でパリパリだ。
乾ききらない撥水加工の通勤靴の中は、ぐちよぐちよと実に気持ちが悪い。

たまりかねた友和が提案した。

「軍人のお二人さん、今日はそろそろ打ち上げにしないかね？ 民間人にはもう限界だ。風呂入ってさっぱりしたいんだ。駄目かね？」

エンタメが言った。

「民意を第一に考えるのが連盟軍の根幹思想だよ。中尉、操縦出来そうか？」

コクピットを撫でながらaタイプが答える。

「大丈夫です。VF型時空機よ。外見じゃわからないものね。大佐、提案があります」

「よし、了承だ。あそこが一番だ。すぐ行こう」

納得顔のエンタメに、思わず口を挟む友和である。

「ちよつと待った、軍人さん達、あんたらテレパシー使ってるのか？ 俺にも解るように言ってくれよ。民意を尊重するんだろ？」

軍人二人は顔を見合わせて笑った。

aタイプが言った。

「友和さん、『惑星温泉』に行く事にしたの。いいところなのよ。もちろん大佐のおゴりよ」

「なんだと？ そりゃないぜ！ そうだ、後でコトミ艦長に請求書回そう。……家帰るよりずっと早く行けるんだ。混浴だからさ、ダンナもきつと氣にいるよ」

混浴温泉と聞いて友和が嬉しくないわけがない。

「よし行こう。すぐ行こう！」

V F型時空機は振動を始めた。

そして、子ノ渡文化会館の屋根に、綺麗な丸い穴をあけて、轟音と共に外宇宙目指して飛んで行った。

宇宙遊泳

子供の頃、田舎道を親父におぶさり、歩いた。この場合、親父が歩く訳だ。

親父は夜空を見上げて教えてくれた。つまり、夜歩いてた訳だ。ソ連という国が、人工衛星に犬を乗せて打ち上げ、地球を回っているのだと。

そしてソ連のガガーリンという人間も、地球を回って帰ってきたのだと。

だから、地球は青くて丸いのだという事が解ったのだと。めでたい事だ。たいしたもんだと親父は言った。

友和は地球を見ていた。

しかもコクピットのモニターではなく、宇宙服のヘルメットのゴーグル越しに直接見ているのだ。

宇宙遊泳をしていた。

VF型時空機は外宇宙へ出て、自由落下に入った後で、蛭の完全撲滅の為に、機内の空気を一旦抜く事にしたのだ。

その間、思いもよらぬ宇宙遊泳をしている友和なのである。

ハッチから『折りたたまれた空間』の大量の空気と共に、凄い勢いでゴミと一緒に蛭の死骸やら灰やら、あの蛭汁が吐き出されて行く。

ゴミの分別は大丈夫なのか？ とaタイプに尋ねた処、太陽に向かって放出したから問題は無いのと言った。

地球だけではなく、月や人工衛星もくつきりと見える。

「まさかこの歳になって、宇宙から地球が見られるなんて思わなかったな」

感無量の友和であった。

そして、とりあえず携帯を取り出して、携帯ムービーを撮り始める、平成の、お気楽オヤジ、江守友和なのである。

惑星温泉

UB258H637 辺境小惑星群温泉郷。

通称、惑星温泉に着いた。

銀河系でも指折り人気の、隠れスポットなのと言う。

小惑星、至る所にお湯が湧き、まさに湯の郷、お湯の国。

露天風呂から湯煙り越しに見上げる、淡い紫の空に浮かぶ母星の、ルビー色とサファイヤ色に輝く二重リング越しに見る三重太陽の逆三原色が、いやがうえにも幻想的なムードを醸し出す。

——嗚呼、私は此処へ来るまで何も知らなかった。涅槃と極楽の境には惑星温泉が在るのだといふ事さえも……。

銀河の大詩人、ダルメシアン・ロッカの長詩の冒頭部分は、広く知られている。

とある宿屋の宙ポートに、VF型時空機は着陸する。

エンタメが言った。

「此処は俺の親父の頃から鼻屑にしていた処でな。料理が美味いし、最近の女将がまた、なんとも面白いんだ」

案内され座敷に通されると、早速女将が挨拶に来た。

《ここにちは なの ようこそ いらしやいませ なの おかみの
ろぼ みなこちゃん なの れおなるとだ びんちせんせが
つくた ゆうしゅうな ろぼと なの なの ためごろさ おげき
そなの ろぼ みなこちゃん うれしです ごゆくりどうぞ なの
なの》

着物姿も麗しいロボ・ミナコであった。

挨拶を済ませたロボ・ミナコが去った後、じつと顔を伏せていたaタイプが口を開く。

明らかに狼狽している。

「大佐ア、ロボ・ミナコですよ！ エステボーヨシユキが掠っていったロボットなのよ！ という事は、この宿屋は宙賊宿よ、泥棒宿なのよ！ どうしよ、大変な所に来ちゃったわ」

落ち着き払ってエンタメが答える。

「ああ、確かに此処は昔、泥棒宿だった。――」

だけどそれは、俺の親父が根城にしていた頃の古い話だよ。

親父は遠藤為吉っていう、銀河に名だたる大泥棒だったんだ。

親父はエステボーヨシユキに惑星ザルドスで助けられたお礼に、この宿を譲ったんだ。

此処ではヨシユキも真つ当な商売をしてるんだ。

結構繁盛してるからな」

「ふわあ、大佐のお父上、泥棒さんだったんですか？ びっくりですう」

とaタイプの目が丸くなった。

「ああ、正確に言うと、俺は親父のクローンなんだ。――」

泥棒親父、遠藤為吉はクローン影武者を5人作った。

為一郎から為五郎までね。

仲間内では、大泥棒の息子、エンタメ五人衆と呼ばれていたんだ。俺が末っ子。五番目の為五郎だ」

「ふわあ、大佐もクローンだったんですかあ？ なんだか嬉しいですう」

とaタイプの目が、更にまん丸になっている。

「親父は酷い奴でな、自分がドジを踏む度にクローンを身代わりに、懲役に行かせたんだ。その為に創ったんだからな。全くたまんないぜ！ ついに俺達は反抗して、全員逃げ出したんだ」

「それで軍人になったのかい？」
と友和。

「ああ。この宿へ来ると、いろいろ思い出すよ」
とエンタメ。

「クローンの兄さんたちは、今でもドロボーさんなの？」
とaタイプ。

「為一郎は、金庫破りの技術を生かして錠前屋になった。――
為二郎は、ドジな奴で、まだ服役中だ。

為三郎は、逮捕された瞬間に警察官になるって決めたそうだ。
今はハリー・ハウゼン星で刑事をやってる。

…… 刑事の仕事も、俺達には向いてるんだな。

為四郎は、泥棒稼業が今もやめられない。だから兄弟の中じゃ、
こいつは大金持ちだよ。

そして俺、為五郎は、やっぱり泥棒技術を生かして、連盟のスパ
イになったって訳だ。

考えてみればこの仕事は、泥棒と刑事が混在しているようなもん
だからな。

……ご静聴ありがとう」

エンタメは、泥棒時代の事を色々と思い出しているのだろう。感
慨深い顔をしている。

さて、なにはともあれ、やっと念願の風呂に入れるのだ。
蛭の臭いともおさらばできる。

三人は浴衣を引っつかむと、岩場の上の渡り板を通り、大露天風呂へ向かった。

「……素敵ね」

うつとりと空を見上げたaタイプがつぶやいた。

まさに絶景、お湯も最高。ああ、気持ちが良い。
この世の天国といってもいい。

女将のロボ・ミナコが、たすぎがけで、酒と竹製の酒器を携えて、
岩の上の長い渡り板を、足取りも軽く渡って来た。

《ためごろさ よしゆきさから なの えちご の たからやま
なの ぜひ のんでください よしゆきさ ゆたの なの みなさ
きもち いですか？ ゆくり していて ください ね なのな
の》

竹の酒器をお湯に浮かべ、為五郎と酌み交わす、ぬる爛の宝山で
ある。

常識的に見慣れた景色とは全く色合いの違う世界なのだが、それ
はそれで見事に調和のとれた、美しく落ち着いた世界であった。

桜色に上気したaタイプは、大露天風呂の何処までも続く岩風呂
の浅いお湯の中を、まるで少しでも素晴らしい景色に近づいて行こ

うとでもするように、地平線に向かって歩いて行く。

やがてその美しい裸身は背景の一部となり、マゼンダの長い影を岩の上に、何処までも延ばすのだ。

此処は極楽浄土だと言われても友和は信じるだろう。
しかも、これ程旨い酒が飲めるなんて。

「ダンナ、越後の酒は桁違いに旨いよな」

「まさに切磋琢磨してるって事なんだろうな」

「吟醸とか特別吟醸が旨いのは勿論の事、普通酒がまた、凄く美味いんだよな」

「辛口で切れのいいやつばかりだから、勿体なくて、冷やでばかり飲んじまう。欲を言わしてもらえば燗酒向きの奴が、なかなか……」

「その点、この宝山はねえ、燗酒も旨いねえ戦友」

「ベストチョイスだ！ エステボーヨシユキって、ワカッテルな」

「うん、あいつはワカッテル男だよ」

飲む程に酔う程に越後の酒は旨いのだ。

小惑星の惑星温泉で交わされる、地球の、日本の、越後の酒談義である。

こんな贅沢は神様からの褒美に違いない。
何故なら三人は、命がけで戦って生き抜いたのだから。

友和とaタイプとエンタメは、今や戦友であつた。
戦友と酌み交わす酒は、また格別に旨いのだ。

江守友和の冒険 「蛭^{ひる}」 おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6705i/>

江守友和の冒険 蛭（ひる）

2011年4月14日21時51分発行